

Eureka XII

六年制通信 No.12 令和6年6月21日(金)号

書かれないもの

子どもの頃の耳の記憶、目の記憶、鼻の記憶、舌の記憶、これらはずっと残りますね。流行っていた歌、木造校舎の長い廊下、燃えカスになった練炭、給食で出たクジラ肉、みんなもう失われて二度と体験できないのですが、今でも頭の中に鮮やかに蘇らせることができます。不思議なことですね。青春時代の思い出も残ったままです。こっちは少し美化されている気もしますが。老人は昔のことをよく覚えていると言いますが、私も実感します。でも昔を思い出すたびに新しいことを一つずつ忘れていく気がしているのですが、ま、仕方ない。老化ですね。

先週から昔の色々なことが一気に思い出されて頭の中が混乱しているのですが、きっかけは桂ざこぼさんの訃報です。私、学生時代に何度かざこぼさんの高座を聴きに行っているのです。ざこぼさんの師匠は桂米朝という稀代の落語家で、私も心から尊敬し全集も愛読しておりました。ざこぼさんは正確無比な米朝師のお弟子さんとは思えない芸風なのですが、「天災」を初めて聴いた時は衝撃でした。笑いっぱなしでしたもん、私。あれは米朝師が演じててもあそこまで笑えません。ざこぼさんの持ち味ですね。それで、先週からざこぼさんの高座が頭の中で繰り返されているわけです。ちなみにコンプライアンスという概念のなかったころ、ざこぼさんは「動物いじめ」という演目の創作落語をしておりました。このタイトルが今ではアウトですわな。「キリンに熱い餅を食べさせたら、キリン、首が長いさかい長いこと熱っ熱っ熱がりますな」とか「猫にネズミの絵の描いたコンタクトレンズをはめたら、猫、ずっと追いかけていきますな」など、くだらんと言えれば誠にくだらない話ですが、確かすぐに放送禁止になったのではなかったか。私は大半を記憶していますけどね。

ざこぼさんは自分の師匠を大変尊敬していました。いつかテレビで何かの評論家みたいな人が落語協会の分裂騒ぎのことを「いくら自分の師匠だからといって師匠が右と言えば自分も右に行くといったような、自分の意見がないようではいけない。何事も個人で判断しなくては」と言ったのですが、ざこぼさんは「わいは師匠の言う通りにする」と言い切っていました。私も自分の先生を深く尊敬していましたから、ざこぼさんの言うことがよくわかりました。ざこぼさんは師匠を一人にさせるわけにはいかないという趣旨のことも言っていました。立派ですね。

落語界の師弟関係の全体像は私にわかるはずもないのですが、師匠が弟子を育てるときに厳しい稽古があることは知っています。特に米朝師の稽古は厳しいことで有名でした。この一対一の稽古ですが一体何を指導しているのでしょうか。嘶自体は本を

読めば書いてあるわけですから、理解もでき覚えることもできるはずです。では、面と向かってどんな稽古をするのでしょうか。それはもちろん、本に書かれていないことを教えるわけですね。書いていないもの、書かれないもの、書きようのないものを教えるという点で、実は私たち教師もそういう仕事をしているように思います。私たちこそ、それこそ知識を教えるだけなら教科書や参考書を読むように言えばそれでおしまいですから、それに書かれていないことを伝えるために生徒の前に立っているのではなければおかしいですね。文字になっていないもの、つまり無形のものを伝えるわけですが、それは自分が勉強してきた道筋であったり最も理解に苦しんだ箇所とその克服であったり、如何にして自分が専門教科を習得してきたか、どんなきっかけでこの教科を好きになっていったか、自分が自分の先生にどう学んできたか、そういったものを話すこと、要するに雑談と言えばその通りかもしれませんが、それが無形のものであります。そして、君たちは高校を出て大学に進むと、本当に研究中であるがゆえに書くことの未だできない領域に触れることでしょうか。もし自分で新たな1ページを書くことができれば、こんなに素晴らしいことはないですね。

今週のおすすめ

・東野圭吾 『クスノキの女神』 (実業之日本社)

これ、今までの東野作品の中でも上位に入るのではないかな。面白かったし考えさせられました。前作の『クスノキの番人』も読み返してみましたが、主人公の直井玲斗や叔母の柳澤千舟の性格や物語の背景が丹念に描かれていて、東野さん、さすがの力量だと思いましたね。クスノキに念を込める、近親者がそれを受け取る、預念と受念が新月の夜と満月の夜に行われる。その番人が柳澤家の大切な仕事。何ですか、オカルトですかと世のインテリの方々はこういう話を信じないのかもしれませんが、私は信じます。現代人は何でも科学、特に物理学で解明できると思いすぎています。科学で解明できないものは何でも「偶然」として片づけます。いやいや世の森羅万象には私たちの理性では到達できないものがたくさんあると私は思います。目を凝らし耳をすませば不思議は至る所にあつて、私たちはもっと謙虚に驚くべきです。

さて今回の作品は、不治の病に侵された男子中学生と詩を書く女子高校生、そして二人の夢を応援する玲斗、さらに認知症が進む千舟、それらを今回も丹念に描いています。中学生はものすごく絵がうまく、女子高生の作る物語を絵にしていきます。二人は絵本を作ろうと頑張ります。絵本の中の主人公は「10年後の自分が見たい」と言います。さて君ならどんな未来を見せますか。考えてごらん下さい。東野さんの解答に私は納得しました。他には考えられないと思いましたよ。

途中、味の記憶をクスノキは受け取ることができるのか、それを伝えることができるのかという問題が出てきます。前作では音の記憶を完璧に伝えていましたが。このあたり、中学生の離婚した両親と前作の重要なキャラクターである和菓子屋の跡取りを絡ませるところなども読者を喜ばせますなあ、東野さんは。

BGMは Celtic Woman の *Amazing Grace* でした…。